

# 「人間はフィクションを食べて生きている — Fake News, Science, and Narrative —」

## これからを 支える概念群

大学院レベルに設定された本研究会では、ポストモダンのキー・コンセプトに次から次へと遭遇する。参加者たちの日々の問題意識と実務経験に、設楽から提示されるこれからの支える概念群が重なりあい、知的な熱気にあふれる研究会となった。



『言葉と物』（ミシェル・フーコー）、『ポストモダンの条件』（ジャン・フランソワ・リオタール）、『虚構の近代 科学人類学は警告する』（科学ノラトゥール）、『科学の解釈学』（野家 啓一）が第1回の環連本として提示された。

## 問いが 次をつくる

マレーシアと東京を往来する経営者K氏は、この映画の**2元論的構造**を指摘し、沖縄で離島の活性化支援をミッションとするH氏は、**反知性主義**と離島地域の未来課題を重ねる。大手eコマースでAI・ロボット先端事業を推進するK氏は『サビエンス全史』と合わせサイエンティスト視点で映画を読みと、横浜市立大学2年のH氏は**イマジネーション**がチンパンジーにはない人間の**Intellect**だと知る。公園経営で地域活性するNPOのK氏は科学者が議論を煽って商売していると驚き、3Dカンパニーのクリエイティブ・ディレクターK氏はデータの**信憑性**に疑問を投じる。BOPコンサルタントT氏は正誤に関わらず人は信じたい**ナラティブ**を信じてしまう傾向に言及。コンサルティング企業でダイバーシティ推進のY氏は「**主観・客観の破綻**」というポストモダンのテーマへ石を投げ、大手IT企業S氏は**Merchantsが横行する現代でどうしたら人びとが納得する未来を描けるのか**を問う。来日20年ソウル出身のマーケティング・ディレクターS氏は、周囲の**リパタリアン**とどのよに会話・対話を成立させ共に**イノベーション**を起こせるかと問いを立てる。

## 意味づけられ 言葉を学ぶ



沖縄の会場ともつなぎ、参加者一人ひとりから、映画をめぐる感想や問いが持ち出される。別の参加者が呼応し、考えを展開し、対話が広がる。要所所で、設楽によりポストモダンのコンテクストでそれらが**意味づけ**られる。

**初めて聞く言葉や概念**で意味づけられることで、参加者は新たな見方と考え方を身につけ、日々おこる事象を**別の見方・考え方**で捉えられるようになっていく。

また、自ら問いを立てることで、学習が起こり、変化が起こる。学習とは、行動バタンの変化を言うからだ。また不適切な問いは、不適切な方向へ人を向かわせてしまう（堂々巡り、ときに致命傷）。本研究会は、日々のビジネスの中で、クリエイティブな**「問い」**が新たに立てられよう、問いの立て方を研鑽する場でもある。

## 目利きの CINEMA

CINEMAとは世界を映しだす装置である。2016年の研究会では論文を題材に、2017年の研究会では映像資料を題材に、毎回視聴した上で参加する形式。選ばれた映像には、様々なモダンの限界とともにポストモダン現象が映し出されている。本研究会では、ご参加の皆さんと、その映画を踏まえた考察や問いをめぐり、縦横に対話を深めていく。



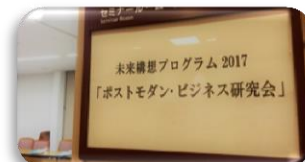
『世界を欺く商人たち』  
(原題 “Merchants of Doubt”)

本作の原作者ナオミ・オラスケスは、カリフォルニア大学に所属していたが、その後、ハーバード大学に移籍し、現在はそこで科学論を担当している。

## ポストモダン ・ビジネス

オープニングは「未来構想プログラム」主宰の設楽から。

“少し大きな視野で、ビジネスの今後を展望してみましょう。それがモダンとポストモダンという枠組みです。これまでの伝統的なモダン社会で通用したさまざまな原理や条件、約束事が、いま大きく揺らいでいます。このようにモダンの原理が揺らいでいるとき、いままでの座標軸に歪みが生じますから、個人も企業も、地域も国家も岐路に立つことになります。さまざまな迷走や衝突が生まれ、堂々巡りが始まることになります。そこで、モダンの原理とは一体なんなのか、その限界がどのようなもので、今後どんな方向に向かって進んでいけばいいのかを、この研究会では語り合います。多くの場合、新たな見通しまではなかなか伝えてくれないものです。しかし、**今後の展望を示すのがこの「ポストモダン・ビジネス研究会」です。**”



## 開かれた 対話と創造の場



東京・鳥居坂の国際文化会館に、ビジネスパーソン、NPO、大学生、経営者など、今年も多様なメンバーがそろった。ビジネスもマーケティングも「人間」が行なうこと、ということで、12月までの全6回を通じて、ポストモダン時代の「人間」をテーマに深めていく。

本研究会の特徴のひとつは、異質なメンバーが集まること。そして、設楽と参加者同士の**対話によって Co-learning（共同学習）の場**になること。

“**Diversity & Dialogue**”。この「2つのD」はイノベーションを起こすための大事な条件だ。この研究会の、**この場自体が、そうしたイノベーションの原理で設計されている**。今までも、ここから新しいビジネスの芽がいくつも生まれている。